

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	脳神経科学領域 精神分子科学教育研究分野 氏名 工藤 周平
指導教授氏名	中村 和彦
論文審査担当者	主 査 加藤 博之 副 査 福田 眞作 副 査 村 上 学
<p>(論文題目) The low level of understanding of depression among patients treated with antidepressants: a survey of 424 outpatients in Japan (抗うつ薬の服薬経験がある外来患者のうつ病に対する心理教育の実態調査)</p>	
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>本研究は、うつ病患者に対する心理教育の実態調査およびその効果を検証したものである。対象は青森県および秋田県の5つの病院に通院中で、これまでに抑うつ状態を呈したことがあり、抗うつ薬の内服歴のある外来通院中の患者である。2013年2月から同年9月に、自己記入式アンケートを用いて、(A) うつ病の症状、(B) うつ病の一般的な経過、(C) うつ病の原因、(D) うつ病の一般的な治療方針、(E) 抗うつ薬の服薬期間、(F) 抗うつ薬の中止方法、(G) 抗うつ薬の副作用、(H) 精神療法の8項目について説明を受けたことがあるか質問した。また、各項目について0-10点で自己評価による理解度も調査した。その他のスケーリングとして簡易抑うつ症状尺度(QIDS-J)や機能の全体的評定尺度(GAF)、臨床全般印象評価尺度(CGI-S)なども用いた。参加者の年齢や性別、発症年齢や罹病期間についてはカルテで確認した。統計解析にはSPSSを用いて行い、説明を受けたことがある群とない群の2群に分けて諸因子について比較検討した。また、(A)~(H)各項目の理解度と年齢や重症度などをPearsonとSpearmanで相関をみた。p<0.05を有意水準とした。結果は、回答を得た424人中、男性は134例、女性は290例であり、平均年齢は56.1±16.9歳であった。診断はうつ病が364例、双極性感情障害が27例、気分変調症が10人、人格障害が10人、その他が13人だった。GAFとCGI-S、QIDS-Jの平均はそれぞれ66.1±13.5、3.3±1.0、9.2±5.7だった。説明を受けたことがある群の割合は(A) 61.8%、(B) 49.2%、(C) 50.8%、(D) 57.2%、(E) 46.3%、(F) 28.5%、(G) 50.6%、(H) 36.1%だった。(A)から(H)の各項目の理解度は、いずれの項目でも説明を受けたことがある群が説明を受けたことがない群よりも有意に点数が高かった。また、(A)から(H)の項目の理解度と年齢および発症年齢、CGI-S、QIDS-Jと理解度の間には負の相関を認め、GAFとは正の相関を認めるものが多かった。</p> <p>本研究では、説明を受けたことがある群が50%に満たない項目が4項目あり、項目全体でも説明を受けたことがある群は47.6%に留まっていて、うつ病に対する心理教育は十分ではない実状が窺えた。理解度については心理教育を受けたことがある群の方がすべての項目で有意に高かった。相関からは年齢や発症年齢が若いほど理解度の得点が高くなり、より重症で機能が落ちている人ほど理解度の得点が低くなっていた。理解度は自己評価であるため実際に有している疾病に対する正しい理解の尺度と異なる可能性があるものの、患者が自身の疾患について十分に知らないと感じていた。限られた地域および医療圏での調査であり制限はあるため、今後は他の地域での調査が必要である。</p> <p>本研究は、うつ病患者に対する心理教育の実態とその効果を明らかにし、心理教育のさらなる普及による有効性の進展を示唆する新知見を示した。今後の診療および臨床研究に大きく寄与する内容であり、学位授与に値すると思われる。</p>	
公表雑誌等名	Neuropsychiatric Disease and Treatment 2015;11 2811-2816